

水辺の 生物



メダケ

(雌竹) イネ科

写真提供：木原浩氏

関 東地方以西の本州、四国、九州に広く分布する多年生常緑竹。主に丘陵や河岸、海辺などに群生する。

地下茎は地中を横走し、その側枝が地上で直立して稈^{かん}となる。稈の高さは5~6m、直径は1~3cm程度で、緑色で滑らかな中空の円筒形。桿はやわらかく通常は無毛である。上部は密に分枝し、枝は各節から3本~9本出る。節は低く、節間は15cmほど。葉の長さは20~25cm、幅は15~25cmで、無毛で少し硬く先は垂れている。筍は5月頃に出るが、食用にはならない。

その姿はすらっと細く伸びて、女性を思わせることからオンナダケ(女竹)ともいう。これに対し、やや大形のメダケは男竹という。品種としては葉に白条の入るシロシマメダケ、黄条の入るキシマメダケ、形の変った葉がつく変種のはがワリメダケなどがある。

稈は粘りがあり曲げやすいので、昔からいろいろな生活用具の材料として使われてきた。主なものとしては、籠^{すだれ}や簾などの編作製品、稈を利用した筆軸やしの笛、割竹を利用した団扇^{うちわ}や提灯の骨材料などがある。

メダケに限らず、タケは捨てる場所がないと言われ、子どもの遊び道具から高級な工芸品まで幅広く日本人の生活に溶け込み、日本独自の文化として継承されてきた。しかし、最近ではプラスチック製品などの進出で利用されなくなり、繁茂しすぎて野生状態になっている場所もあるという。

- 参考文献 『新牧野日本植物図鑑』 牧野富太郎著 2008年 北隆館
『原色日本野外植物図譜3 秋から冬』 奥山春季著 1984年 誠文堂新光社
『タケ・ササ図鑑~種類・特徴・用途~』 内村悦三著 2005年 創森社